論説



田原保二*

●美しく愛される土木構造物への提言

昨年末，土木学会構造工学委員会に「橋の景観とその形態および色彩に関する研究小委員会」なるものが誕生した．

ご同慶の至りに思う．そもそも，この種の問題をテーマとして学会が公の議論を始めたのは大正14年に溯る．ちょうど隅田川の架橋を好機として数年間に集中している．この時機に論議の指導的役割を果たしたのは建築の伊東忠太・武田吾一の両先生であろう．その後いったん低調となった橋梁美論も，昭和5年ころからの東京・大阪を中心とする都市計画事業の進展に伴い，再び関係者の関心をそそるに至ったが，不幸にしてわが国は間もなく国を挙げての戦争に入り，やがて敗戦，国土復興へと茨の道を歩むこととなる．昭和26年朝鮮戦争を契機として祖国の復興建設はようやく活況を見せはじめ，新構造形式の橋梁の研究とその建設によって以後十数年間のわが国橋梁界は百花繚乱の時代を迎えるが，同時に生産増強，経済優先の国策は年とともに強化され，橋梁技術者もその埒外たり得ず，橋の景観や美観などは圏外の問題として軽視されていた．橋は建築と異なり国の政策は直接設計や施工面に影響する．そんな間にも同じ建設業界の建築のほうでは東京オリンピックを頂点として，例の丹下ムードが公然と世に俾り，デザインにおける構造物の美的価値が少なくともその機能や力学的安全性と同じ場で論評され——むしろ経済性よりも優位に評価され——その結果として数々の優れた施設が世界の注目をひいた点で，私はいまさらながら建築家のみが持つ古い伝統の力に，いささかの羨望を禁じ得ないのである．

さて，すばらしい橋，橋のある美しい風景，愛される橋とは一体どんなものを指すのであろうか．昔からこのような意味で絵や詩になった名橋は内外に数限りなく多い．そこでまずこれらに共通した美的要素を探り求め，その普遍性を追求せんとする試みと，このような試行錯誤の過程において得られたいくつかの客観的要素をなんらかの方法で例示化する——例えば現存のいくつかの橋を例に統計的に論評解説する——ことによって少なくとも現在における日本の橋のデザインの底を引き上げたいと願うのが当初に掲げた小委員会の差しあたっての希望である．したがって，その活動はこの希望的目的にそって理論の究明よりもまず一般設計担当者に対する美の認識の普及と実務効果を狙いとしている．美は元来創造されるものであり，模倣の美は美にあらずとの論がある．ただし，美の感情は対象たる橋そのものにはなくて橋を眺める人の側に惹起するものであり，視覚から知覚を通じて，終着駅，大脳皮質の特異な統覚活動の緊張によって対応的に誘起される感情の特異なひらめきであるといわれ，この方面での心理学的・医学的研究は近時アメリカ合衆国において特に盛んである．その意味では感情の対象が既存のものであり試行の過程が模倣であろうと，なんら問題とならないのである．ことに橋の場合，その構造形式と使用材料の選択は建築におけるほど広範な自由度を持ち得ない．その点からも模倣的創作は出現しやすいのである．また，架設地点の地形や線形などもいっさいあてがい扶持であり，工芸品や自動車のように設計者の自発的感情の表現がすなわち意匠そのものとは成り難いのである．そのゆえにこそ，われわれ土木技術者，特に橋屋は建築以上に美に対する豊かな情操の陶冶が必要であり，機能と技術と経済に加えて美との要素との相互均衡を図ることが肝要で，彼ら以上に努力致さなければならないのである．すなわち，土木における従来の設計者から新しい資格を具えたデザイナーの誕生を今に期待する．そのためには土木関係技術者が一丸となって，これを阻害するあらゆる周辺の古い弊害を一掃し，事態を改善することに協力することこそ肝腎である．いたずらに欧米の美しい橋を例として，わが国の橋の美醜を軽々と論ずることは，われわれ実務に携わる橋梁技術者，土木技術者として採るところではない．

* 正会員 工博 土木学会構造工学委員会 橋の景観とその形態および色彩に関する研究小委員会委員長